

## 55 敗戦・陸軍少佐青酸自殺・救命処置

・蘇生

中室 嘉祐

明治三年大阪城に陸軍造兵廠が設置され大砲等の製造が始まり、昭和大戦争となり、兵器工場は大阪城付近全域に及んだ。陸軍は急増する造兵廠職員の仕事建設を国電鴻池新田駅南一キロの青田の中の産土神社・河内市北部出張所（元の村役場）の西側と東側に計六〇〇戸の楠風荘住宅の建設を日本住宅営団に当たさせた。一戸当たり二〇〜五〇坪の土地に三部屋（三畳六畳六畳）程度の木造平屋建てで、当時すでに資材乏しく、例えば瓦は現地でセメント瓦を製し等々で、勝手口は半坪程度程のコンクリートの土間に水道栓が一つ立つだけの勝手口兼台所であった。

昭和戦争は日毎に激しく広島・長崎が特種の原子爆弾であると知らされると、無条件降伏の勅語が昭和二十年

八月十五日放送された。その前日、今迄無傷であった大阪陸軍造兵廠の工場群に対して、米空軍は一屯爆弾多数を投下して、全工場を完全爆破した。八月二十日、進駐軍総司令官マッカーサー元帥は厚木飛行場に到着し、占領行政が始まった。

そんな九月のある夜、楠風荘造兵廠住宅の明〇少佐夫人が近くの女医宅の扉を激しく叩いて「主人が今、青酸自殺をしました」と二〇cc位の無色の小瓶を示して「助けて下さい」と叫んだ。「宅には胃洗滌器がありませんから、他の医院へどうか」とは言わず「すぐ参ります」と夫人を帰した。

「青酸事件が終戦後、東京で多発したので、手元のポケット医学書・西川義方著『内科診療の実際 中毒篇』には「青酸カリ：解毒剤Ⅱチオ硫酸ナトリウム」とあり、当時大阪帝国大学病院の他の図書を調べても同前であった。もしも米兵が大阪城内に進入すれば、造兵廠では各将校机に秘蔵した青酸カリ瓶を一斉服用するとみられた。」

直ちに往診靴、チオ硫酸ナトリウム五〇〇瓶一本、ガ

